一茶句集

上

一茶句集

飛鳥山謄寺住中校

東京

博文館藏版

俳諧寺

一茶肖像

春甫冪信寫

おのゑら
まつ〻みてよ
ひいき目ハ
さく家ゝを
たゞあるかな

一茶

序

加賀文庫

つゝ字ハ鏡を鞭ゝ鏡
共ゝ毎ゝ画ゝ
ゑゝ歩ゝ生涯を
歩ゝ数ゝ
らゝて

言ひ仰せらるゝまゝ毎
に古池や古池の
句なといふ一葉に程
俳諧の句あつめて侍まへ
かゝやの句なといふし程か
もとは此道句のる云

味に指さを染めこと
なふるゝまゝ一つに西に
みちて吾ゑくして始
て暁まで屏しは是を
序にかへてふすさてみゝ
卑をしるしてとゝを誌焉

しい文は十ふの雪
はなあやめ繕る社ふを
しゆ三百足ふ空ふ仏
ちくる仏身見

一茶發句集上

春之部

元日や上々吉乃淺黄空
元日や立のまん内の屠家式
還暦
喜寿や寿の上ゐまこ寿ふこのくる
新家賀
年寿や面ぢちの石四むまて

蓬莱や唯三文の古代の松

富士画ふ

初春やよ代のゆめ見る立ふ

老ぬ言の山中ふ年籠りして

霧もうさ法僧の鳴なり海の忠

三時の弁も拙女松ふかくみ

なりとのや

美々のうしろ人ふ涙もろ

猫ふ〳〵や十さのゆめる侍如

かま獅子ふ腮くさひぬ門の松

迹〳〵ふやふ秋さ五十年

初美ふ猫ふ二見る春秋の形

待美ふ〳〵ふころもとるのは弐

小松引く人とて人社をうむあり

塚ふやや蓂のふるもを津のふ

天神系

ちさいふの麻上下や梅乃也

梅の木ふや影ふや影さぬ三日の月

梅折や袖にまとまると大きゝみ

相馬覽古

梅うゑや平親王の住月秋

梅咲や唐土のうゝれ其ぬしゝ

月の梅の砌のあんみやくのとうもるぬ

笠ぬゝや梅の咲日を吉日と

山ゝうもめたゝしく新宅を

墨ゝ所のてゝを

二歩判の初書出しゝり梅乃香

下戸村や赤んんとゝ梅の色

梅の香ゝを塗めとさしゝ身ゝ

ゝゝ綾とくゝ千ハ告ゝ梅の香

嶋原

入口ゝ白あいゝゝふなゝく柳北

太のゝの踏えゝく眺る押ゝの歌

けゝのゝんとゝく鳥と柳北

由屋山

ゝゝも親ゝ住とゝや梅乃香

[illegible]

秋の物ふ[illegible]　小梅村

[illegible]

松宮[illegible]

[illegible]の張[illegible]　垣根哉

[illegible]や　[illegible]　梅の[illegible]

[illegible]の[illegible]　[illegible]や　[illegible]　[illegible]

[illegible]や[illegible]　[illegible]の影

老婆洗衣画

彼の桃ゝ源を[illegible]よ　[illegible]

軽井澤

笠[illegible]

葉[illegible]

此門の[illegible]や　[illegible]の[illegible]

栗之[illegible]

古[illegible]や[illegible]

[illegible]

[illegible]れと[illegible]　門の京

西ゆや枯のもとうゑふるとの雪

小児のあとけあるを

時雨ふ赤ゐ目をしてうゑ多まり哉

素堂うゑ毎八十八才賀

門柳や柔の字あり枯雪毎

雪とけや碑ふ三丈立白年

世ふあれハもりふとうゑや門乃雪

庭の雪ふるふ掃ふうゑ

つゑや杖ふたゝうゑ雪解川

三日月をそゝ雪をそゝんうゑ

蕚入や墓の松掃ふうゑ

芽出しうゑ人ふ仕州ハあるを

庭冥加賀

福の字ふ門や野ふの新笑ひ

かゝれ家や猫ふ小ふ二日魚

初午

ものの世を世ふ乃猫時ふうゑ

蕚も持ふぬ口ふをそゝ仕ふ稲荷

一年を寒く新を雪のみを
寒り元んす方
出代やけの実ふとも荷そこ重
せのそりやいつくも同し梅の色
二月十四日雪ふりそそ
古のそそろへ雪のふる沼鶴哉
寒く新く大分しく猫の恋
蒲ゟ英の天宮そりつ猫恋
うそれ猫帝哉ふ集そそりそ里

りうけの弦ちんみ侍や小田の原
板橋
かしまや江戸そそ原社場り様
閏二月二十九日とのみ日面水影
おそそりぬれい多そく所跡袋
首ふこのけそ足法ゆく例の角田
堤ふかる事そ方のそ方み
ゐれと小数小家そいそそ閏
かりき方そそ上のそそをみ

みやこ川のぼりて不天地九拍子
うつめく四方を新しき御
こゝろ地をもつくく拍をいたして
物の〳〵心拍を待とうんこゝろ
詠まる冊子の字未ふいつくこゝを
書は伏しいつめてこゝを氏代を
ひのくとを学んで待る
西面院や心舟をうんて待る唐
善善光寺

開帳ふ釜の中も親る連
釜のこゝとのけ〳〵心るる通る
仏みいさ梅ふいさとも親 釜
釜こゝのや物仏や茶の湯しゝと
茶出をそれハ糞をそゝこ釜のこゝ
雑こゝ吟やきのこ雑毛〳〵こゝ代の私
こゝ雑こゝのきり留りや待 九海
黒いやゝタみ〳〵と雑こゝ社参

独坐

[illegible]

南都

[illegible]

[illegible]

右八十五章　魚淵二休校

それ竹を世俗とやうなる物なり世俗とやうなる竹なり

奉納

おんなりし嫁も重なりて来ぬれ
てふてふや此世のまゝになれぬに
葉からびんに振鉢か生まれなり
田に堀まてんし筆乃かてぬれ
門のそよ子ら這へハとひきへハとよ
さ鏡し名も嫁をふらくく又眠る
てふとりく娘山路の案内しなれ

孫面もりしくふかれ去ハ

木の緒もてふを尾もるも彼岸の紛

橋本町上人

功出も出りなるゝ乃法談
こゝけ縁のや白の手かゝま一筋
功出るや茶毒庵か安北箸の山
れ中上くゆるかとしする小村武
美しきれ中上りたまた食小庵
承り付き稲を看也しくさきの銭
か海ふしや昔となさ乃手代挂
茉の玉や露の級ましかしく

かるゝ秋門の木葉の雪咲ちりぬ
大葉小葉雪人例ゝ散咲ぬ
春の日や雪ゝも見ゆる赤山
傘さゝく箱根越ゆる春の日

春甫新宅賀

安堵しゝく嵐も穏ゝ春は雨

雪の日や おゝ生の松の影
春の日や 嵐の外なる角田川

宵の春てりのいろ春の日
夏の月の影ふりかゝる春の雨

時いかんしそいかく

柳よはゝゝ春せ春は雨

水江春色

すつちんも時や作ゝん春の月
佳いそゝ二人深ゝや春は月
春の水 牛ふゝれて若葉
春の風 地面ゝ布は形り雨

狗ゝ嵐とる なりの 毒ゝ抱
行〳〵しに日 永とるれと田舎式
手の〳〵ふかゝつくゝゝや市の雑
抱ゝゝ世やそゝゝの件も併まる
家宮を行ゝもなりて第主客
好〳〵や世としうを嘆る客

觀音奉納

只ゝのゝ忘もゝゝ〳〵なの通り
出のけあゝの他人ハゝゝゝ

お病ハ醫

ゝを抱ゝれ〳〵ゝゝゝ式
ゝの後ゝむゝん生ゝゝゝ
形ゝ活ゝゝゝゝゝゝゝ後

三月十七日 保科詣

ゝゝゝゝゝゝゝゝ帳
人撰ゝゝ一人ゝゝの後
抱ゝ後ゝゝゝゝゝゝ口動る
茶のゝゝ醫ゝゝ併ゝ

塩竈をいでしふねや古方信
山の月　あはれ人を思ふしるべ
刈　萱　堂
あの世とは地獄なりつも親なれば
苦のあはれもつくづくまこと果敷が
大和めぐりをする人ふ旅のまことと
いつのをさつけく
かるがるしく迹たんよそそう世の
今の世や猶も扶るも花見堂

弓張ハ家もあるう堂ふ形
昔の遊廓や古う軒ばハ引くく迷
山下常乗院ふ人ことりそなるとも
仏扶をしるうとしふ百年の
彼岸ありとて淫酒いと殊勝之
かくふたうふる扶のまことすくせの
結縁うたうさるふやかるが対ふ
生れ変てのうれしく志そなく
隨喜の涙を掬ひぬそのこと其角

[illegible]
なりしもそのあるかの形みや
あるんにそなへ今の百とをのかさ
みと成りぬかくのみもいつる又
昔とあるんされと家陰の世を
きのこの如く形その福さへ持ぬ
境界法仏必見極めるよ
花柳情も笑うよ一大事
新古来

[illegible]
清所ふく
排突う腮てをくへる撰う紅
人影ふりつとくるる　夕撰
撰へとえんておんく　撰形式
筆ふ入くく撰のうけもあのうをも
一本ハさくくもうの安寿の役
所ゆうふ書世を撰ゆくけ式
東西のをユ変立くまてゆも

○山ふかうりりとのはハ三月
廿日ごろ
燈ゝゝゝ笠も撫の像は弘
法大師の大仮堂めぐりゝゝ
名ゝの所降る麻美とおの
日ゝ絵ゝ重ゝふられゝり
坊かゝやゝぬさゝとて撫乃
帝結ものゝとゝゝ独事ゝり
ゝふ者情ふ五元集とゝ

ゝのゝ坊ゝハ是寛の句
おゝなゝ
小坊ゝゝや親の俤ゝて山撫
撫ゝゝと唄ゝれゝ寄末弘
乃ゝゝよ生れて物ゝゝゝ弘
一おゝゝふ撫ゝゝゝゝゝ弘
歓難戯
ふゝんゝゝや撫の寄を持ゝゝ
撫仲ゝの歌をゝゝ

○

永劫をすぎてもさめさせをいとふもの
今ぞしるまことあくまの業障
百安の石ふたりかくしたるかな
まこのは乃入所なり藤の衣
根岸みく
山ぶきをさしぬきさしぬ根根
鶯ふきんとなくなる蚕うの
さ屋ばけふ春まきる蚕
やよ風這へくまの月方へ

地獄

夕月やゆの弁ふく時田ふし
餓鬼
ちちやはさるを春を蚕
畜生
苔ふ仏法とも法とも志ぬ
修羅
ふふふの本篇のさくち

人門

さくらの井ふうこめく高生式

天上

かももりやさそ天人の出退屈

右八十三章　春耕　稲長校

夏之部

下谷一雲の品しるく更衣

物りろい物を昔ありて更衣

とゝとゝハ片ゑ出ぬるやろもく

ろゝの日やゑても屋そか昔衣

去ふろゝ綿ふゝぬいく出りろを

文鹿ろ蚤ゑまろりろを

物りろけの結目ふかる　初袷

四月の月を眺めて

雲のうしやてんぢくてん乃初祭

春日野に若草萌て鶯の音を聞

大山詣

四月五日本堂をかたく閉て

夢ぢと祝ゝや吉日堂

かゝる家や死人出れの忌ちち

夕べのけぶりや雲のかゝるの裏花持

見るものちんと住ること出るる式

てもさそふ福おのちんか

通ひ路ふ陸ゝ行ゝやうつゝ

二十四年業花只一夜美

芭蕉一葉を見るもうれしき

芥子さけく類集の中を通りて

郊の忘乃姫ふ名代のうゝちか

庵の若草生くも赤ゝ

家上へ今ふ咲ゝん 若乃宮

乾ゝを躍る童や美業以

禪寺

[illegible]も掃除[illegible]や木下宮
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]と呼[illegible]
[illegible]大[illegible]
[illegible]ると[illegible]松この邊
[illegible]岩ふ腰[illegible]て一[illegible]を
[illegible]

[illegible]を待[illegible]久[illegible]部公
[illegible]て[illegible]時[illegible]松の月
[illegible]
[illegible]
[illegible]

清西八郎宗朝入[illegible]
時[illegible]槻[illegible]
卯の[illegible]
[illegible]

閑窓

春なの和月八日も閑なる

高野山

地獄へハ形うまれてやかんこゝ

ちの世は地れうのところ果たゝ

ゝを吐く口はさしこゝの養

ゝり如くハ仏叡乃養ゆてハ

月如ゝきハことしの蚊も喰まゝり

ゝの蚊は苦やゆまゝへ思をこゝへ

ゝ家ゝ以ゝも出ゝ蚊ゝ那

陸へや蚊ゝ出ゝと解出ゝ

ゝの蚊やゝ出ゝこゝて陸ゝ

蚊程乃穴ゝ見ゆる那ゝ

とゝ思ゝと見ゝや蚊も耳見ゝハ

出ゝ陸やゝ初鳴ゝ表乃ゝ

蚊のゝゝゝきゝ分ゝの角ゝ

かゝゝゝりゝや出ゝハ池と支周へ

茅の祝無以風ふりゝゝゝ

弟関を天くゝ葉緑にくゝり
西方の弗ふきくゝまる 左西外
物の義
西方や秋もかくれぬ山の尾
粒くゝ皆心苦
かくゝの名や是帰くゝ更田植唄
ほとゝぎすやゝ鳴ふくゝまる 竹の雫
春せつけくゝるの法くゝや夏の月
苔の雫をまくゝけと咲ふくゝり

右五十八章　呂芳　士英校

日くゝ懈怠不惰寸陰
くゝの日も樹ふり出よ 聖も又
初つくゝ鶏をみもかくゝ分て法くゝ
くゝれ鶏くゝるの法ふふくゝ
初嵐法のとくれくゝる 手風外
不思池

蕎麦や呼び込む蔦の葉越しに
きれぎれも蕎麦ふるまふ稲田川
名月や太郎ぬいくくり猪
紫の戸や淀のくくりふかくくる
かくさぬくくりくくり雲れ雪の山
寄くくふる雨恋ふる雨の羽織
庫くくる雨と鞆ん雨ぬれまくり
六月や月秋くくけく蟬くくひ
小金原

毋くくう蕎麦しく呑法法式
人生くくくくふあれよ法仏
旅人や山ふ腰くけく心去
無限欲有限命
此風ふ不思ふふ甚生安
旅渡をくくくくくく安生変
松影や庵てまるく千古雨
ふふくくれハ出りくくる庵式
西山や庵地くふ月秋

猶樂坊を訪ひ給ふ所のかう氣
三界無安とかつるを
悔よけの料も絶しく扱とへ
豊年の彩を上るり門の幟
幟一ッ赤てふ赤むけうと伝式
世うくハもとつとまれ仏の幟
侍ふ幟を延せる由るの形
屋もとつふ幟うをもり是をまる
墨の流かとへうとふ係乳うの

のくなくは和尚山京うの形
墨の流うれもまくハ是しき
幟ゆやを家もふ第ふ
幟ゆやを天ふひつはく第ヶ川
紙うそくうを仏を時ケ多の幟
新宮賀
涼しさや鄰のかうぬ小川 蟻
春甫京へ移を送る
涼しうん這へかう義の水

両國橋上

ちらちらも法國寺ふいて涼風
そよ〳〵吹〳〵涼風を
藪村の新宅今別しく夕涼
魚とりや桶ともたてゝみち
涼しさや弥陀成佛のしるしハ

洲ゝ

新涼や汁のあたゝる背戸の流
きのふハ鮮魚ふ富〳〵ゝふハ

松宇佛

秋涼や笑ひ別めくあり
涼風やちらら〳〵ちいきり〳〵
ちゝ風も陣の弗社あまり
別の上の涼とも志〳〵て夕涼
上総國百首の郷を東南ふ
山連り西ハふゝ寄て防人の
使ふ寛元の地ふりとて此度
陣屋いとなむ躑躅とのあと

甚畠の腦のゆゑふさしかく
妨なる小家あり主とゝんゝて
聖をも去るゝ如き老婆ひとり
癩をゝこゝ在りゝを業形
人浴く憚ゝく洗ふあり中
いゝを去る濯いふをのこ和とり
もちりるらいつゝのとし
古ゝをとゝふふり移ゝ今ハ
江戸の本所とやゝんゝ人の

数ゆゑふりをなすゝ
傳の者ゝりふ吹行るとゝを
洞ゝゝゝこゝふさゝゝハ
平男呼ゝをゝしゝよろしき
聖地ふゝゝしゝ家ゝを
人ゝ去ゝりのゝゝふゝ平男ふハ
永く髮結司のゆゝし文
とゝゝく洗ふハ生涯二人ふち
とのふを中ゝりく方をやゝく

生くさきん竹のさ糸乃ち細き
稀ひをやめく遅くくくたまの
はかをちりてのふ古ふ無常を
観しく凄くくる秋の秋ふハ
かくくふく風ふ面対を移うひ
四季ん住きふ廿年の程を
荷ふハなんわくるのくん
池ウ仏家このかまへのさとりふ
なるとそ天より池ふ蓮ひ

ひのふなまとくくくを
きりそきけこふつれよと
いふ志濃むくくとそそ
しきそ明りて灯ん仏ける
ゐくんやうある首打ふりく
いかやうくもけきむきのふの
うの是ハけくハ先祖よういく世
ともあく住ふくくく大るのく
栖あれハきとく黄金星ふとく

程なくとも郡国ハ一揆カ
蜂起ふ事あるべきを思ひ出べき
ひさしふ人のゆゑにはらあるき
寒ゆるされすや命斷るとも
あへハ行うとあるを思ひ出
見をゆりくなりぬるをあ
ゆせハ奉行人の義ハ今ハ
拾ひ上きよもろふく却
のちふふひをとぬくひ

綱をりしくつひふ平家を
よくさく地とりなりぬなれ
月日の照らひかをり霧の
却るふ平生とし流るのの
出れる國命をもき幸ん
志ふとをきをこカ若年を
ありるる
月をもそしられぬ人浦を
確水ふく

志賀の浦に山うばのあるを見て
義の筆ふ ほんと宮あく筆ふ
迹うしもあるべきなり 小夕立
潮うらう出現しうり雲の峯
城の道雲の峯をりつきたん
投知しうしたの先あり雲の峯
川狩や地蔵の孫の小紅美
川狩のうら浪ひりやむ水玉

玉川

萩もさやや色ある浪や夕さらし
麻の筆ふ 借秋 書て浪しうり

右 五十五章

素鏡
文路校